

原子力規制委員会記者会見録

- 日時：平成27年6月17日（水）14:30～
- 場所：原子力規制委員会庁舎 記者会見室
- 対応：田中委員長

<質疑応答>

○司会 それでは、定刻になりましたので、ただ今から原子力規制委員会の定例会見を始めたいと思います。

早速ですが、皆様からの質問をお受けしたいと思います。いつものとおり所属とお名前をおっしゃってから質問の方をお願いいたします。

それでは、質問のある方、手を挙げてください。よろしいですか。ミヤジマさん、どうぞ。

○記者 FACTAのミヤジマです。今日の一つ目の議題で田中委員長も御指摘なっていました。去年の9月に10の漏れがあったと。それがこの6月にですね、報告が上がってくると。よく考えるとこれ10ですから、その前年の300tから比べると30万分の一の大した事故だったと私は思ってなかったのですが、やはりいかにも役所の事後対応、報告主義というのか、全くのお役所仕事で、やはり1Fについては30日ルールとか、90日ルールとか、やはり一定の期間であれしていただかないと、事故があったこと自体もう私は忘れてしまっていたんですけども、それからことの軽重からして、これがそんな重大な事故ではなかったと実は私はあまり思ってないものですから、やはりその辺の取り組みが少し1Fと他の休止した原発と同じようなように考えていること自体がですね、私は非常に違和感があって、その御趣旨を先生もおっしゃっていたかと思いますが、どうお考えになりますかね。

○田中委員長 ミヤジマさんが受け取っているのとやや共通するところがあると思うんですけども、1Fは日々動いていますよね。それからいろいろ、今日も申し上げましたけれども、要するには野ざらしの状態でいろんな施設が動いていますから、他とは全然様子が違うわけですよ。ですから、トラブルが起こったときは、速やかに原因を究明して手当をするということが大事だと思うんです。それから報告が遅れたということと、手当が延び延びになっていたこととは、必ずしも一致はしていないと思うんですけども、大体すぐにああいった凍結して割れたんじゃないかと想像できるところは、あまり試験の方で時間がかかって、その後の手当の方が遅れるということではなくて、やっぱり手当をして、それから事故原因をはっきりさせるとか、少しそういうところも踏まえて、あまり形式主義ではなくて、現実動いているというところを踏まえてやっていただく必要があると思います。それで、報告が非常に完全を期そうと思うといろいろああやって時間がかかってしまってしまうので、その辺は少し当方としてもよく考えていく

必要があるかも知れません。

- 記者 金城さんが大変苦勞されていて、忙しいのはよく分かるんですけども、こういうのは30日ルールとか、是非先生のリーダーシップでですね、見える形で改善されたら、これと類似のものがまだいくつも残っているような話ですけども。それで、もう一つ伺いますが、やはり私1Fについては委員会として御所見をお伺いしたいのが、やはりこの間の中長期ロードマップですね、これで例えば3号機の使用済燃料の取り出しは20年というか、2年ぐらい後ろに倒れると、これが本質的に委員会としてどういうふうを受け止めて、1Fとどう向き合っているのかの議論を本来私は期待していたのですが、やっぱり中長期ロードマップの受け止めですね。これについて委員会の皆さんどういふ議論をされたのか伺いたいですね。
- 田中委員長 これまた役人的と怒られるかも知れませんが、中長期ロードマップを策定したのはエネ庁と東電なんですよね。それで、私もオブザーバーで閣僚会議にも出てましたけれども、そこで申し上げたのは、これはそちらの計画であって、実際には実施計画が出てきたところで、うちとしては独立して安全の観点からきちっと評価をし、判断をするということは申し上げました。ロードマップに踏み込みすぎると、我々後の判断ですね、規制委員会としての判断を縛ることになるので、そこは非常に難しいところではあります。これは前からそういうことがあって、私がそもそもオブザーバーとして参加するということが、ちょっと踏み込んでいるみたいなどころがあるんですけども、一応これは、1Fの問題は国全体の問題であるから、規制委員会、規制庁としても最大限の貢献はしますと、御協力はしますという心で参加しているんですね。だから、ちょっと歯切れが悪いかも知れないけれども、そういう受け止め方です。
- 記者 最後にしますが、やはり今回のロードマップで、一番注目すべきは中々格納容器の止水が難しいと、冠水が難しいとすれば、突然気中ですとか、空気中でデブリを割って、どうやって回収するのか私は想像がつかないんですけども、正にこれなどはですね、安全とか危険性とか考えると、どういうリスクがあるのかという私のような素人でも、チェルノブイリやスリーマイルのことを考えてもですね、水による遮蔽がなくて、デブリをそう取ってくるようなことが紙に書かれて、ポンチ絵書かれてもですね、全くリアリティがなかったんですけども、これは正に専門技術的な問題なんですけれども、水に遮蔽せずにですね、そういうものが取り出すことのリスクというものをですね、これはロードマップとは関係ありませんけれども、先生の御知見の中でどういふふうにお考えになるのか、それはやっぱり一度伺いたいですけれども。
- 田中委員長 どういう取りだし方がいいのかについて、あのロードマップでは、水張りを否定している訳ではないんですけども、幾つかのオプションを上げつつあるんですけど、それに対して私が申し上げたのは、要するに炉内の状況、デブリの状況が全く分からないような状況の中でどういふ方がいいのかについては判断できないから、このロードマップについてはコミットできないということを申

し上げて、さっき言ったようなことも含めて後々実施計画のところできちっと判断しますということです。今のフィージビリティがあるかどうかについてについては条件がはっきりしてこないことには何とも私も判断できないところがありますので、ちょっと答えができないかなと思うんですが。

○司会 次の方、いらっしゃいますでしょうか。オイカワさん、どうぞ。

○記者 日経新聞のオイカワと申します。

今の質問にも絡むんですけども、デブリではなくて使用済燃料の方の取り出しなんですけど、これもこれから3号機、2号機、1号機という順番で2017年度以降に始まるというふうになっているんですけども、一方ではオペフロの除染がなかなか進まなかったりですね、がれきがまだまだ残っていたり色々まだ課題があると思うんですけど、委員長として今御覧になっていてこの難しさとかどういうふうに御覧になっていらっしゃいますでしょうか。

○田中委員長 私どもが作ったロードマップというカリスク低減化のあれでも使用済燃料をできるだけ速やかに早く地上に降ろすっていうことはかなり最優先事項になっています。だけど、実際に1、2、3と残っていますけど、3号機の使用済燃料が一番やっぱりリスク的には大きいんでまずそこなんですけど、3号機がああいう大きな爆発をしたということといろんなことで、非常にまだがれきも上の方に乗っかっていますし、プールにも落っこつたりしていますので、それをどうやって取るかと、人が直接それを見ながらやれるような状況ではないですね4号機のように。4号機でも相当被爆を心配したんですがそんな状況でないんで、まだまだ先の見とおしが得られたという状況ではないと思います。どういうふうにするかっていうのはまだまだ検討事項だと思っています。

○記者 話はちょっと変わるんですが川内原発についてなんですけれども、使用前検査で今1号機が先行して進んでいる形になっていまして、当初はいろいろ準備不足だとかそういうこともあって少し期間が延びたりしているんですけども、最近になって割となんて言うんでしょうか九電側の準備も整ってきたなというような話も聞くんですが、委員長としては今の進捗状況というものをどのように御覧になっていらっしゃいますでしょうか。

○田中委員長 私がどうこうっていうんじゃなくて、最初の予定よりは何度か延びちゃったっていうところありますけど、それはきちっとやる、使用前検査をするために延びているんだから、まずそこをきちっとやるという意味ではそれが延びることについては、別に私は延ばしてでもやるべきことはやらなくてはいけないというふうには思っています。あとはそれが延びれば当然いろんなものが後ろにずれてくるんで、そのこと自体は私から何か申し上げるようなことではないと思っています。私自身がいついつまでにとかっていうあれを持つてる訳ではありませんので。

○記者 九電の方の対応が整ってきたというような印象はお持ちでしょうか。

○田中委員長 よく分かりませんが、段々やっぱり少しずつ検査が進むにつれてコミュニケーションも現場で行われていると思いますので、それなりの準備ができるようになってきているのと、最初に立てたスケジュールに無理があったのかも知れないって感じがしますので、ある意味ではリーズナブルになってきたのかも知れないですね。九電の体制が整ったかどうかというところまでは分かりません。

○司会 よろしいですか。他、いらっしゃいますでしょうか。

それでは、本日の会見はこれで終わりにしたいと思います。御苦労さまでした。

—了—